

# 移築担う諏訪の会社意欲

岐阜市の都市景観重要建築物の指定を受けた大正時代の建物「目下部（くさかべ）邸」を名古屋市中に移築することになり、古民家再生や寺社建築を手がけている諏訪市上諏訪の建築会社「田（でん）空間工作所」が、七月上旬から作業に取り掛かる。代表の一級建築士関謙二さん55は「一生に一度しか携われないような名建築。かつての大工の技術を学ぶ良い機会」と、意欲ある大工を募っている。

目下部邸は、大正十昭 収めた岐阜県出身の目下 九五三年の私邸。孫の和前期に海運業で成功を 部久太郎（一八七一一 目下部泰雄さん78）によ

## 岐阜の大正建築「目下部邸」



高素だが一級の木材を使い、大工の遊び心に満ちた目下部邸。岐阜市

## 「かつての技術学ぶ好機」

来月着手  
大工募集

ると、十年がかりで大正前期に完成したという。千二百平方メートル敷地に木造二階建ての数寄屋風日本家屋と、れんが造り三階建ての洋館を併設。大正期に流行した和洋折衷だが、和館と洋館が独立した例は全国的にも珍しい。

打っている場所や木組みが外から見えない。時間をかけた丁寧な仕事」と絶賛。「壊さずに解体するには、当時の大工の知恵比べになる」とやる気を見せる。

現在は空き家で、親族らによる「目下部同族会社」が所有・管理している。だが、会社の解散が決まって維持が困難に。地元からは現地保存を望む声が強く、岐阜市も買い取りを検討したが、めどが付かず、名古屋市の八事山興正寺（やんざんこうじょう）へ譲渡することになった。

移築するのは、日本家屋の一階部分。上座敷を中心に木曾産とみられる良質のヒノキや、廊下の十に近いスキの一枚板など、一級の木材を使っている。一見簡素だが、竹を効果的に使った部屋や、曲線が美しい禅宗様「花頭（かとう）窓」など、至る所に棟梁（とうりょう）の遊び心や美意識、技術力の高さが垣間見えるという。

同寺側とつながりのある木曾地方の材木会社の仲介で、田空間工作所が作業を請け負った。現地を視察した関さんは「細工がぎやしゃで、くぎを

「伝統建築に関心のある大工に、本物に触れてもついいチャンス」と、社外からも大工を募集することにした。問い合わせは田空間工作所（802666・58・66002）へ。